

任しておき、オイ喜いやんお前暫く物を云はぬ様に啞  
になり、源やんお前は聾になり」

「よつしや」

「そばで喋ると應對が仕憎いで」

「解つてる」

とブラ／＼と歩いて居りますと、向ふの方から参りまし  
たのは馬方さん、馬子は年中馬に叱言こしごを云ふて居りま  
す。ドウ此のがきは長い面おもてさらして、はりたほすです畜  
生め、臍すね節が曲んでるがな、と無理な事を云ふたもんで  
昔から馬の丸顔て見た事がおまへん 皆長い面おもてだす。ど  
畜生めて馬は畜生に極てます。臍すね節が曲んでるので歩け  
ますので、眞直なら歩けまへんがあの様に云ふので馬が  
動きますね、優しいのがえいと云ふて京言葉で馬を追う  
たら馬は動きまへん、ドウお歩きえ、あんたのお顔は長  
いお顔ですな、何してお居るね、お足あし曲んどおすがなと  
云ふたら、馬がそうどすかいなと寝て仕舞ひます。

「ほんまに聞こえんか」

「ほんまに聞こえん聾ぢや」

「聞こえたあるがな、大将お黴りなしにな」

「オイ馬子、おなぶりも迷子札も巾着も胴籠も貰入れも

何も無いね、何んやと云ふねん」

「オ、客人よう喋る人やな、馬はどうやと云ふね」

「馬はドウやが、駕ならハイたのみますや」

「そうやない、馬はどんなものやと云ふね」

「馬は顔の長い四ツ足の尾のブラ／＼仕たもんや」

「そんな事は云ふて貰はんでも解つてる、馬はいらんか

と云ふね」

「馬を煎る様な大きなほうらくがあるか」

「手荒い事を云ひないな、そうやない馬買ふてんかと云

ふね」

「馬みたいな大きな物を買ふたら、道中するのに持て歩

けんがな」

「ドウ、オ、客人馬はどうやな、オイ客人馬はどうやな、  
人にばつかり喋らして何んとか云ふたらどうやいな」

「馬子、其の男は啞や」

「何んぢやものを云はんと思ふたらお前啞か」

「ア、ア、アイ、ヲシヤ」

「何んや云ふてる様やがな、お前啞か」

「ア、ア、ヲシヤ」

「云ふてる様やがな、ほんまに啞か」

「ほんまに啞や」

「云へたあるがな、其方の人お前もそばで顔ばつかり見  
てんと何んとか云ふたらどうや」

「オイ馬子、その男は聾や」

「お前さん聾か」

「フェー、私はつんぼぢや」

「チョツとも聞こえんか」

「チョツとも聞こえん聾ぢや」

「もの數を云はしなさんな、泊りまで行こうかと云ふね  
ん」

「馬子、今から何處まで行ける」

「そうやなア、宮川を越すに越せん事は無いが、夕方が  
急しいで明星泊りぢや」

「明星に宜い宿屋があるか」

「そうぢやな、三田屋三郎兵衛玄關横付けぢや」

「そら危いなア」

「何がぢや」

「玄關横ちやげぢやと」

「横ちやげぢやない、玄關へ馬が横付けになると云ふの  
んぢや」

「何程で行く」

「そうぢやな、お前方高い事を云ふても乗てくれんで、  
一人前オンテで行こうか」

「馬子、オンテは一寸高いで」